

第一節 連邦前史

心の赴くままに夢の世界をさまよっていた意識が現実世界に浮かび上がりかかったとき、最初に耳に飛び込んで来たのは、宇宙船のエンジンの単調な脈動音だった。最初は、ぼんやりと霞んでいた視界が次第に焦点を結んだ先は、水晶の破片をばらまいたような星空を鮮やかなブルーとグリーン、そしてホワイトで切り取っている半円形の天体だった。

レーフル・ファウルス・ネレイド少将はゆっくりとその長身を起こし、ヴェュー・スクリーン・パネルに浮かび上がる船外の光景に見入った。彼はその天体の名を知っている。いや、シエルメス連邦の住民なら、連邦母星シエルメスを知らぬ者はないだろう。

戦艦『フェアリ・ホーク』の私室、『フェアリ・ホーク』を旗艦とする第二任務部隊は、連邦暦五七二年二月のグラン・ハイ・ローゼンバツハ戦役”からの帰還途上にあった。

コンソールに視線を走らせ、艦長のミュレイス大佐からの定時報告を読み流す。

少なくとも、任務部隊司令官が戦闘艦橋へ駆けつけねばならない事件は起こっていない。

レーフル・ファウルスの心は再び現実を離れ、時を逆行する。

半径数千光年の領域を占め、数百の有人惑星と三〇〇億の人口を誇ったシエルメス連邦。そのシエルメス連邦の発祥は、現在の母星シエルメスから一〇〇〇光年余りを隔てた惑星メルティア。ありふれた黄色恒星系であり、その最外縁部には十数万個の大小の岩塊が、この星

最終稿

系の他の八個の家族と同様に惑星軌道上を巡り続けている。存在を確認され、命名された小惑星だけでも既に一〇万個を超え、小惑星帯全体の総質量は優に一個の内惑星に匹敵するとさえ言われている。

かつて、エルメティア恒星系には九個の惑星があり、その第九番目の惑星が何らかの原因で破壊されたのが、現在の小惑星帯ではないのか……”という意見は、小惑星帯の存在が広く知られるようになってから少なからぬ天文学者達によって主張されてきた。しかし、シエルメス人が、この宙域に本格的な科学的な視点を据えるようになったのは比較的新しい。

連邦暦五六二年、小惑星の一つに微かな文明の痕跡を発見するとともに、第九番惑星の破局について大胆な仮説を発表したのは、一四歳で連邦総合大学への入学を認められ、この宇宙考古学教室に所属していた一五歳の少年だった。

少年は、約一年をかけて小惑星帯を踏破し、最大の小惑星エフトルに、天然には存在し得ない超ウラン元素の痕跡を発見した。この超ウラン元素は、通常の熱核融合反応、或いは現在連邦で普通に利用されている超融合反応からは生成されず、その生成過程は当時の原子核物理でも最先端の仮説によってしか説明し得ないものだった。

“……未知の原子核技術を縦横に操る先住民族が、この小惑星帯の前身たる第九番惑星に居住しており、おそらくは戦争、その他の破滅的な状況によって自らを葬りさつたものだろう……”

少年は注意深く“居住しており……”と表現し、“繁栄しており……”とはしなかった。理由を問われると、彼は答えたものである。

「第九番惑星は恒^{エルメティア}星から遠過ぎますから、繁栄できるとは思えません。ひよっとしたら、どこか別の惑星からやってきた生物の植民地か何かかも知れない、そんな気がするんです」

反応はさまざまだった。

多くは、彼の論文の内容よりも、彼の年齢に注目して賞賛を送り、或いは嘲笑の対象にしたのだ。曰く、“天才少年”、曰く“子供の趣味と学問を混同してもらっては困る”、曰く“専門のことは専門家に任せておけ”。

しかし、当の本人は一向に気にする様子すら見せなかった。相変わらず小惑星を巡って調査を重ね、大学の他の学部や他の研究機関にまで協力を求めて研究を続けた。そして、翌年新たに発表した論文は、人々を驚かせるに足りるものだった。

先の仮説では多くの研究者が、“マニアの遊びと、真面目な研究を一緒くたにしてもらっては困る”と大仰に眉をひそめていた。この論文は、彼らに少年のそれが“真面目な研究”であることを認め、これに論争を挑まねばならなくさせたのである。

シエルメスの生物学者の多くが、これまで“進化のミッシング・リンク”と呼ばれる問題に頭を抱えてきた。約五〇〇年前まで、惑星メルティアには、シエルメス人の直接の祖先と思われる生物が存在しなかった。全く突然に、シエルメス人は現れ、たちまちメルティアを支配した。少年は言つ。他惑星からの移民という仮説が、これまで現れなかったのがかえって不思議なくらいだ……と。

この一六歳の少年は大胆な仮説を導入することでこの問題を解決しようとしたのだ。およそ五〇〇年前にエルメティア恒星系に移民してきた“宇宙人”こそがシエルメス人の祖先にほかならない、と唱えたのである。

連邦暦五六三年三月、連邦圏セリア恒星区の州都アオフスプラフトで開かれた宇宙考古学会は、まさに彼の論文をテーマにして開かれたと称してもよかった。出席した研究者のすべてが、あるいは少年の主張を支持し、あるいは正面から反駁を試みた、とさえ言われるほどである。

最終稿

第二の論文の発表によって、少年は学会の注目を一身に浴びることになった。繊細な美貌に恵まれたこの少年を、連邦のマス・メディアは“時代の寵児”として大々的に取り上げようとさえした。しかし、少年は華やかな世界には一切関心を示さなかった。連邦総合大学宇宙考古学教室のおかれたイアス衛星軌道上のコロニーに籠もったまま、彼は、連邦の起源を説き明かす新たな手がかりに熱中していた。

もし少年が、その生涯を研究に注ぎ込むことができていたら……或いはシエルメス人は己れの起源を極めていたかもしれない。が、そして長くもない一生の内、彼が研究に打ち込めた日々は更に短いものしかなかった。

八月……宇宙考古学教室のおかれた宇宙コロニーが原因不明の爆発事故を起こす。五〇〇人以上の研究スタッフ、学生、職員が死亡し、少年が数年間にわたって集めた資料も塵と化して宇宙に四散した。事故を免れて生き残ったのは、たまたま帰郷していた十数名のみだった。8
が、彼らの八割が数年以内に病氣、乃至は事故による不可解な死を遂げている。何かの謀略ではないか、との噂も囁かれたが、一切の公式資料は事故に関して沈黙を守った。人々は、彼らの起源にただ一人挑戦し、真実の脈にまであと数歩にまで踏み込んだ少年の名をも忘れ去り、その後数年にわたって思い出すことはなかった。

人々が彼の名を思い出すのは、若き考古学者としてではなく、シエルメス連邦空軍の天才参謀として、である。

少年の名はレーフラム・トゥリユー・ネレイド。

レーフル・ファウルスはコンソールに手を伸ばし、3DTVのスイッチを入れる。浮かび上がった映像に、さして熱のない視線を泳がせる。ドラマらしかった。ニュース・チャネルに切り替えたが、視線は、依

然自分の考えに沈み込んでいる人のそれだった。

兄^{ヤマ} は映像メディアに余り関心を持たなかった。音楽を好み、美術にも人並み以上の関心を示したレーフル・ファウルスとは異なり、芸術への関心も希薄だった。だが、個人としての関心は希薄でも、マス・メディアが操作する情報の武器としての威力を知る点で、レーフルは他に比肩する存在を持たなかったのだ。

「映像を信じられない……特に、TVやムービーはね。登場人物が真剣であればあるだけ、演技の真剣さが見えてしまうんだ。真剣な演技は、作り物の白々しさを際立たせるだけにしか見えないよ」

数年前、レーフルを士官学校に訪ねたレーフルがそう洩らしていたのを鮮明に覚えている。影響を受けたのが、レーフルも、こと映像メディアに対する関心を失って久しかった。

レーフル・ファウルスの心は、一〇年近くを一気に逆行する。

「ね、ファウルス、どう思うかな……」

ほとんど連邦母星の自宅に還ることなく、エルメティア恒星系の小惑星帯を踏破して回った、一日、彼は目を輝かせて弟に語りかけた。

「エルメティアの小惑星帯は自然にできたものじゃない。何か途方もない核反応で……そうだね、多分戦争か何かで……シエルメスくらいの惑星が破壊されてきたものに違いないんだ」

「どつして分かるの、兄さん？」

「エフタル……最大の小惑星なんだけれど、ここで大変な所を見つけたんだ。超ウラン元素の谷、とても言うのかな。ただね、どれも連邦の今の技術では絶対にできっこない特殊な元素らしいんだ。今、大学の原子物理学教室で分析してもらっているけれど、大変な発見だよ」

「ぼくも行ってみたいいな……」

最終稿

「行く？ いいよ、ファウルス。今度一緒に行こう。宇宙は面白いよ……」

広くて、果てしがなく……恐ろしい所さ。何も連邦空軍に入ることなんかないんだ。士官学校なんてお止めよ、ファウルス。父さんがそう言ったからって、軍人になんかならなくていいんだ。人殺しなら、やりたい人は幾らでもいるさ」

ネレイド家……というほどには大袈裟なものでもないが、と思つのだが……は、軍人の家系として連邦では比較的良好に知られる。惑星統一戦争時代の連邦陸軍元帥レイモンド・ファールを初めとしてこの五〇〇年余り、数十人にも及ぶ高級士官を輩出、兄弟の父レイフレム・ナイザルも三〇代前半で空軍中將、第一艦隊司令官にまでのぼりつめた優れた軍人だった。

しかし、どんな場合にも例外は生じる。そして、兄こそ、その最大の例外だった。ナイザルの長男レーフル・トゥリユーは徹底した軍人嫌い。彼に軍人たることを勧める、というより強要する父と、宇宙考古学に没頭する兄とでは所詮、妥協点など存在するわけではない。一〇代にさしかかったばかりだったレーフル・ファウルスは一度ならず、父と兄との間に漂う帯電した雰囲気、息の詰まる思いを味わったものだった。

連邦暦五六二年末、兄に伴われたレーフル・ファウルスは、生まれて初めて連邦母星を離れた。初めて訪れた小惑星エフタル……荒涼とした小惑星の風景は、漸く九歳の声を聞いたばかりのレーフル・ファウルスの心を一瞬にして捉えた。

驚く程に険しいクレーターの峰々は、底知れぬ深淵を思わせる暗黒の宇宙空間を切り取って屹立する。背景は、瞬きもせずにおのが存在を誇示する原子の炎をちりばめた壮麗な満天の銀河の大海。

宇宙を手にしてみたい……その思いがレーフルの胸に宿ったのはこのときだった。宇宙とは何と広大なのか。あの星々はどこにあるのか、そして誰の手にあるのか……最初は、それが知りたかった。長じるに

従って、この壮大な世界を我が手におさめてみたいという願望がとつてかわった。

世界制覇を企む秘密結社……子供向け3DTVのプログラムで使い古されたフレーズはレーフルの冷笑を誘う。秘密結社などでは決して世界を手中にすることはできないだろう。それに、彼が宇宙を手にしたみたいと思うのは権力への志向ではない。

父ナイザル・ネレイドは言う。

「力ある者は支配するべきだ」

そして、兄レーフラムは父の言葉を拒絶する。

「力ゆえに支配されるべきものではない」

レーフルにとって、彼のもって生まれた軍事的な才質。

「兄が、シエルメスそのものを賭けのチップにすることが許されるのは、兄がそれにふさわしい類希な天才をもっているからだ。連邦空軍艦隊参謀長は、それゆえに与えられた席であり、理由ではない」

その兄と、更に兄と互角以上にわたりあうル・ラント共和国の軍事的天才クローネス・マールク……彼らと戦い、撃ち破ることにのみ、レーフル・ファウルスは自らがこの世に生を受けた理由を見いだしている。宇宙を手にする、というのはその過程の行き着く先の結果にすぎない。

連邦が、連邦である必然性はない。かつて……長じてから彼の胸にたゆたう咳きがある。シエルメス連邦初代大統領ステイクフェスト・シャトンヒュッテ。連邦そのものを我が手におさめ、史上初めて世界を制覇した霸王の冠を我が頭に頂く野望を抱いた男。玉座の半歩手前で彼の野望を彼の肉体ごと吹き飛ばしたテロリストの爆弾がなかったなら、シエルメスは連邦ではなく、銀河帝国としてその後の五〇〇年を闊したかもしれないのだから。

最終稿

『連邦の歴史を語るためには、その歴史書のどのページからも血の色を消しすることは不可能である』。連邦が成立する過程は、連邦空軍が少数民族を虐殺し、各国の軍事力を威圧と恫喝によって吸収していった流血の道のりにほかならない』

多くの歴史家を輩出したことで知られるメルティア・スルフエイク侯爵家でも傑出した一人とされるフアーリック・トヒユナはその著書『惑星統一戦史』の中でそう述べている。メルティアいう、銀河系でもごくありふれた惑星を発祥の地とする社会が、“統一された単一の政府：すなわち、シエルメス連邦”^{シエルメス連邦}によって統治されるようになるまで、人類は犠牲者の血で舗装された道程を歩まねばならなかったのである。

約五〇〇〇年の時を遡る。かつては“東銀河半円”を征服した人類も、遂に“統一された単一の政府”を欠いたが故に、僅かに“西銀河半円”の二つの惑星に彼らの末裔たる一握りの人々を残して自らを滅びの淵に突き落とした。見捨てられ、忘れさられた人類の末裔たちは、自分達の祖先と歴史を、そして一切の遺産を失い、シエルメス人、ル・ラント人として改めて銀河の歴史にその名を刻んだのである。恒星間を翔ける翼を得た彼らは、目前に広がる大宇宙が彼らの共有すべき正統の遺産であることを知らなかった。

連邦暦が開始されたのは、“第二次惑星統一戦争”後の内戦期が終了し、統一政府、即ちシエルメス連邦政府が首都コーネットを現在の母星シエルメスに置いた年である。

フアーリックは言う。

『連邦政府万歳を唱える手には血に塗れたサーベルが握られ、政庁の壁にはなお生々しい弾痕が穿たれていた……』

発祥^{メルティア}の惑星を離れ、惑星シエルメスに本拠を置いたシエルメス人たちは、最初の数十年間を順調な発展の中で過ごした。シエルメスを中

心に、ティルシニア共和国……現在のタート・レイピア恒星区……が開かれたのが前連邦暦一八四四年。共和国首都は現在の連邦母星ティルシニア州に置かれ、各種産業も発展し、人口も急激な増加を見始めた。

同時期、ティルシニア共和国の祖先と同時に母星メルティアを離れた他の一派は、銀河系中心へ更に踏み込んだ位置に、彼らの理想郷……惑星タルト……を見いだしていた。彼らの指導者ジュリオ・アイゼルンマンは、“貧富の差のない、この世の理想郷”を標榜する共同体政府……のちのセリア恒星区……をタルトに樹立、ティルシニアと並んで順調な発展を示したのである。

ティルシニアと、共同体政府との関係は、最初のうち極めて良好なものだった。シエルメスとタルトの間には複数の定期連絡航路が開かれ、年間数千万の人間が往来した。貿易も増加し、両惑星間に広がる広大な空間に浮かぶ惑星には開拓の手が入られた。最初のうち、共和国政府も、共同体政府も、これら植民惑星の自治の動きには極めて寛大だったから、ある程度の人口増加を見、産業も成立した惑星は次々に独立を宣言した。こうして、前連邦暦一九三〇年代までには、“超大国”とも称するべきティルシニアと共同体政府に加えて数十の自治政府が、現在のタート・レイピア、セリア両恒星区の中にひしめく状況が成立したのである。

“ひしめく”と言っても、この段階での“連邦圏”の人口は四〇億余り。シエルメス人たちの前には、ル・フォント人たちを外宇宙への発展から遠ざけていた天然の障壁は存在しなかった。彼らは、そのままでも“ターネベルクの間隙”を越えてターミア腕へ発展する道を与えられていた。シエルメス連邦政府という強力な中央集権政府を持たないままでも、シエルメス圏は成立し得ていた。無論、そうなっていれば、“前期銀河系大戦”の様相はよほど異なったものになっただろうけれども。

最終稿

ティルシニアが、“航路安全保障隊”の名目で小規模な宇宙艦隊を編成したのが前連邦暦一九二一年。共同体政府が、“航路保全部隊”として同様の艦隊を持つようになったのは一九二五年のことである。前連邦暦一九〇〇年に入ってから急増する小国家群の中には財政的に不安定なために私掠船を黙認し、代償として掠奪物資の何割かを納入させる国家さえ存在した。また、国家間の取り決めの遅れは、犯罪捜査を極めて困難なものとした。“法律の効力は、大気圏をもって終わりを告げる”とさえ極言した国家の指導者さえ実際に存在したほどである。

主要な航路を運営し、従って輸送量も飛び抜けて多かったティルシニアと共同体政府が、これら群小国家の掠奪行為や犯罪の容認に業を煮やしたのは無理のないことだった。言論による説得が効果を持たないのなら、物理的なパワーに頼る以外の選択はないではないか？

決定的な誤謬は、両大国の指導者が軍事力の本質への洞察を欠いたことである。すなわち、一度成立した軍隊組織は、よほど強力な政治力によって抑制されないうちは急速に肥大を始めるといふ事実。さらには、肥大に肥大を重ねる軍事力が、その成立の口実である“市民を守る”ことは決してないのだという歴史的事実に。

最初、わずかに一〇〇隻前後の宇宙戦艦で構成されていた“航路安全保障隊”は、成立以来僅か一二年後の前連邦暦一九三三年には、一〇〇〇隻規模の制式艦隊三個を持つまでに膨れ上がる。一方の“航路保全部隊”がほぼ同規模に達するまでは一〇年とかからなかった。“理想郷”を目指した初代の指導者アイゼルンマンの理想は忘れ去られ、この時期の共同体政府は、官僚による独裁国家と化した観があった。私掠船からの船団護衛という名目は忘れ去られ、軍事力によるシエルメス圏の制覇が第一義として、両国政府首脳の意識を支配した。

第一次と第二次、合計数十年にもわたった“惑星統一戦争”は、これら二つの超大国が締結した軍事同盟『ユナイテッド・インテリジェンス 恒星間連合』に端を発

する。

ナンバー二とナンバー二の握手は第三、第四勢力を恐慌に陥れ、懸絶した軍事力の出現によって煽られた危機感は、対抗勢力の結成を促した。先の『恒星間連合』が、ティルシニアと共同体政府、およびその衛星国家群を傘下においたのに対し、主に中小の国家群が締結した軍事同盟は、『連邦機構』と称されるに至る。

しかし、軍事衝突が即時には生じたわけではない。

ファリックの試算によれば、前連邦暦一九三三年、両者の軍事力比率は『恒星間連合』が四一、『連邦機構』が三二であり、中立諸国が二七。皮肉なことに、私掠船を公認し、犯罪者の流入を黙認していた国家群のほとんどが中立の立場を堅持していた。

もし、中立国家群の指導者に辛辣なマキャベリストが存在すれば、三昧ともいふべきこの状況を利用して漁夫の利を得ることも叶ったであろうが……』

ファリックも歴史上のifに誘惑を感じたのか、著書の中で控えるに指摘している。

『中立を堅持した点で、確かにマキャベリストはいた。しかし、中途半端なマキャベリズムを以てそれよしとしたところに悲劇の種が播かれていたのだ』

桐嶋と威庄、さらには各種の条件を示しての誘惑。両陣営は中立諸国を自陣営に引き入れようと躍起になった。そして一九三九年、中立諸国が『恒星間連合』への協力を決意したとき、“第一次惑星統一戦争”勃発の条件が整った。

外交上の敗北を悟った『連邦機構』陣営は『恒星間連合』の態勢が整う前に軍事的成功によってこれを回復する事を欲した。一九四一年、恒星系エニウエトク付近で偶発した戦闘は見る見る内に全惑星へ飛び火し、半年を経ずして両陣営の全面衝突に発展した。

最終稿

通常兵器での戦闘から最終的に熱核兵器の応酬に至ったこの戦争は一年間続き、当時四〇億を数えた総人口の内三億人が死に、一億以上が負傷して間もなく死んだとされる。これが“第一次惑星統一戦争”と呼ばれる戦いである。

愕然とすることになったのは『恒星間連合』に協力して“第一次統一戦争”を戦った中立諸国だった。戦争が終わり、中立の保証を求め彼らを『恒星間連合』は冷笑で迎えた。今やシエルメス圏の七割を超える軍事力を掌握した『恒星間連合』に、彼らの協力は不要であるばかりか、多くの少数民族を抱える中立諸国は、最早デメリットしか生まぬように思われたのだ。しかも、これらの諸国が結託した私掠船の群れがどれほどの損害を他の国々に与えてきたことが……

私掠船……すなわち宇宙海賊ともいふべき存在……のために、辺境の恒星系への物資の輸送は重武装の重巡洋艦の護衛のもとに行われなければならなかった。巡洋艦の数は限られ、従って辺境への定期輸送12船の数も限られた。辺境での物価は天井知らずに跳ね上がり、緊急の医薬品、食糧、資材の輸送さえ大きく滞る。その一方で、略奪した物資を転売して巨大な利益を得る私掠船組織があり、多くの中立国家がこれらの組織を後援する。彼らが『恒星間連合』統治下の市民の深刻な憎悪を買っに至るのも当然の結果だった。

『恒星間連合』は、これら市民の憎悪に乗じた。

最大の敵である『連邦機構』さえおのが膝下に拝跪せしめたならば、シエルメス圏はもはや手中にしたも同じである。しかし、いくら統一政府が完成されたところで、その政府部内で群小の勢力が支配権を争うような事態を許容していたのでは、名ばかりの統一に他ならない。すでに『恒星間連合』は単独でも全シエルメス圏を掌握し得るだけの経済的、軍事的な勢力を保有するに至っている。この際、将来の禍根は、でき得る限り取り除いておくべきではないのか

ファリックは指摘する。

『後にシエルメス連邦を最も特徴づけることになった“強者の論理”の萌芽を、この時の『恒星間連合』の外交政策に見ることができ』

一九四五年、連邦憲章が制定され、のちの連邦上院の前身である連邦安全保障会議が設立されたが、その内容が中立陣営の市民達を極度に刺激した。かつての『恒星間連合』と『連邦機構』は確かに全シエルメスの経済力の八割、軍事力の七割以上を保有してはいるが、人口比率でいえば四割を僅かに上回るに過ぎない。にもかかわらず、連邦安全保障会議の代議員の内実に四割を旧『恒星間連合』、二割を旧『連邦機構』に割り当て、中立諸国には三割足らずしか与えないのは余りの横暴といつべきではないのか。

これに対して、当時『恒星間連合』の軍事力を支えた所謂“連邦三軍”の将帥のひとり、レイモンド・ファール・ネレイド元帥は言い放った。

「統一戦争で最大の軍事力を注ぎ込み、最大の犠牲者を出したのは『恒星間連合』諸国であり、旧『連邦機構』諸国もまた、休戦条約によってその地位を保証された。顧みるに中立諸国とはなにか。彼らは中立を標榜し、中立の名に隠れて兵力を出し渋り続けたではないか。このような不誠実な同盟者に対して、何故権限、権利を保証せねばならぬのか、理解し難いのだ」

「『恒星間連合』の挑発外交は既にこのころから顕著になり始めている。ネレイド元帥の放言は、『恒星間連合』の真意と言つよりも、彼らの軍事的な激発を期待した挑発にほかならなかつたと言えよう。彼らの意図は的中した。しかし……」

ファールリックの指摘は正鵠を射ている。

「中立諸国の軍事的激発、それがどのような結果を招くか、その点においての『恒星間連合』政府の洞察は、余りにも浅過ぎた」

一九五五年、たまりかねた中立諸国は自暴自棄の挙げ句に『恒星間連合』に宣戦を布告、ここに“第二次惑星統一戦争”が開始された。

最終稿

当然、戦争は『恒星間連合』にとつて圧倒的優勢裡に進行した。“連邦三軍”は開戦直後に十数個宇宙艦隊を動員し、当初五〇を数えた中立諸国のうち三十数か国を将棋倒しに降伏させるといふ大戦果を誇つた。

『半年でかたを着ける』とは当時の『恒星間連合』政府高官の豪語だが、それすら不可能ではないとさえ思われるような状況だったのである。

しかし……

見通しが甘過ぎたことを、彼らは間もなく思い知らされた。

“連邦三軍”は確かによく訓練され、いき届いた装備を持ち、正規兵にたいしては凄まじいほどの強さを発揮した。が、開戦後半年を過ぎたころから彼らの進撃速度は目に見えて低下し、『恒星間連合』政府高官の表情を徐々に歪めさせ始めた。

理由は明らかだった。中立陣営で比較的大きな勢力を保有していた諸国は“連邦三軍”の開戦奇襲にあつて、あえなく壊滅の憂き目を見たのだが、正規兵がほぼ壊滅した約半年後になって徹底抗戦を訴える民族主義者のグループがゲリラ戦術をとり始めたのだ。大会戦と奇襲による正規軍同士との決戦用に訓練されていた“連邦三軍”はゲリラとの戦いに馴れていなかった。中立諸国は人口が多く、しかも惑星の数も多い。

開戦三年後、『恒星間連合』は当初の見通しが大きく狂つてきたことを認めざるを得なかつたのである。戦線は至る所で膠着し、軍事支出はつなぎのほりに上昇した。開戦当時は緩やかだった戦死者増加も四年目に入った頃から急激なカーブを描くようになり、市民の不安を煽り立てた。

『恒星間連合』政府は舌打ちしながらも、彼らの予測が甘きに過ぎたことを認めざるを得なかった。しかし、シエルメス圏を統一し、彼らの覇権を確立する為にはこの戦争を勝利の内に終わらせなければならぬ。では、どのようにして……？

一九六一年、熱核兵器の無制限使用命令が“連邦三軍”に下された。いわゆる『流血令』である。

「群小の国家のナシヨナリズムが惑星統一を阻げるというのであれば、当のナシヨナリズムのよってきたるところを破滅せしめよ。いかなる犠牲を払うとも、シエルメス圏統一を阻害すべき要因を根絶せねば、惑星統一は遂に何らの実を上げずに終わるだろう」

一九六一年初頭に、中立国家の一つに熱核弾頭装備の宙雷が撃ちこまれたのを皮切りに、この年だけで数千発の核ミサイルが使用され、優に一億を超える中立国家群の市民が虐殺された。

力による恫喝を加える事で反抗の意欲を削ぐ……『恒星間連合』の狙いの一つにその意図があったことは確かであるが、古来、力による威圧戦術が功奏した例は少なく、返って被抑圧者の抵抗に油を注ぐ結果となった例が、むしろ多数を占めることに『恒星間連合』の指導者達は目を閉ざしていたようであった。そして、この時も、歴史上に無数に刻み込まれて来た抑圧者と被抑圧者の抗争の歴史に新たな一ページを付け加えたにすぎなかった。

『恒星間連合』は、引き続き核攻撃による威圧戦術を継続したものの、ゲリラによる抵抗はいつか衰えを見せようとしなかった。それほどばかりかかつて『連邦機構』の一員だった諸国にまで動揺が波及、ゲリラ勢力と結んで『恒星間連合』を打倒し、自らがシエルメスの覇者たらんことをもくろむ動きすら現れ始めて、『恒星間連合』政府の高官を狼狽の淵に突き落とした。『恒星間連合』は焦ったが、熱核兵器の過度の使用は、自らの首を絞めるにも似た愚行である。『恒星間連合』はジレンマに陥り、“第二次惑星統一戦争”は止める術もないま

最終稿

まに膠着したかに見えた。

のち、シエルメス連邦初代大統領となるステイクフェスト・シャトンヒュッテ中将が“連邦三軍”の一つ連邦空軍において頭角を現したのはこの時期である。

「ゲリラは癌のようなものだ。早期に思い切った治療を行わず、ずるずると対症療法に頼っていたのでは全身を盲されて死に至るのみだ」

彼は文字通りの無制限熱核兵器使用を主張し、“連邦三軍”指導者の賛同を取りつけると、自ら志願してゲリラ掃討部隊司令官となって最前線へ赴いた。

主張するところに従い、シャトンヒュッテは苛烈なまでのゲリラ掃討作戦を展開した。艦隊兵力を集中的に投入してゲリラの部隊を惑星へ追い込むと、容赦なく熱核ミサイルをその惑星に叩きこみ、あるいはゲリラの出没する広大な地域に核爆弾による集中爆撃を加えて砂漠と化せしめる。余りに苛烈な戦術にさしもの『恒星間連合』政府も恐怖して戦術の緩和を求めたが、シャトンヒュッテは命令を無視、また戦況の停滞に満腔の不满を抱いていた“連邦三軍”司令部、及び市民もまた彼を支持した。

『シャトンヒュッテ提督を“救国の英雄”として歓呼して迎えたとき、シエルメス連邦の基本的な性格が定まった。即ち、その統治は穏やかな民主共和制の手続きを踏襲しつつも、実質的にそれらの手続きを裏づけるのは、強力無比な連邦空軍の容赦を知らない暴力であるという性格が。シエルメス市民は、シャトンヒュッテらを歓声を上げて迎えたが、彼らは古代の専制君主など足元にも及ばない暴君を彼らの統治者として迎えたことにほかならぬことに、遂に気づかなかったのだ」

凄まじいまでの掃討戦は実に三年余を要して完結したが、この間にシャトンヒュッテと彼の部下の手によって虐殺された惑星国家は二〇とも三〇とも言われ、犠牲者総数は優に一〇億を上回ったとされる。また、文字通りにみさかいなしの熱核兵器の投入により、当時の連邦

圏に属していた惑星の四割が深刻な放射能汚染に見舞われたという。

シャトンヒュッテのとつた恐怖戦術は、確かに大きな効果を上げた。しかし、降伏を求める諸国までを憑かれたかのように次々に壊滅させて行ったシャトンヒュッテのやり方は、やはり行き過ぎてはいなかったらうか。そして、彼の戦術を歓声を以て支持した『恒星間連合』と市民達の価値観にもすでに何らかの歪みが生じていたと見るべきではないのだろうか。

ファリック・トヒユナは皮肉ともつかぬ調子で慨嘆する。

“……少数民族問題！ 古来、どれほど多くの複数民族国家がこの問題に直面し、解決し得ないが故に滅びの歌を合唱してきたことだろう。しかし、ここにいたって、我々は古来行われてきたものとは全く異なる解決法が存在することを、シャトンヒュッテ提督によって学ぶことができたのである。”

即ち、問題の源泉となる少数民族を最後の一人に至るまで殺戮し尽くすことがそれである。”

“第二次惑星統一戦争” 終結後、シャトンヒュッテは元帥を最終階級として連邦空軍を退役、政界に転じた。“惑星統一の英雄”、“救国の名将”としての彼の名声は圧倒的であり、『強力な政府と強力な統一連邦軍の結成を！』をスローガンとする彼の一派は連邦安全保障会議で最強の政治勢力として君臨することになった。

旧連邦曆一九六八年、『恒星間連合』政府は統一政府“シエルメスユナイテッド・フエレンシヨス連邦”の成立を宣言、その初代大統領には、第二次惑星統一戦争の英雄シャトンヒュッテ元帥が歓声を以て選出されたのである。

“シャトンヒュッテ提督に、政治家としての功績があるとすれば、それは彼が王にならなかったことだろう。”

最終稿

皮肉な口調で、ファリックは指摘する。

“もつとも、彼の人生のカレンダーが実際の歴史が刻んだものよりもお数年の余裕を有していたならば、シエルメスは連邦ではなく、シャトンヒュッテ朝シエルメス帝国となっていたかもしれないのではあるが……”

大統領としてのシャトンヒュッテが、歴史に対してなした最大の貢献は“連邦三軍”の統一と規模の縮小であるとされる。

“最早連邦圏内に敵は存在しない。今後、我々が敵とすべき存在は連邦の外、即ち外宇宙そのものである”

として、連邦陸軍の大規模な縮小計画を公のものとしたのが、一九七六年。

連邦陸軍は、シャトンヒュッテの示した軍備縮小計画に激しく抵抗した。圧倒的な世論の支持を背景にするシャトンヒュッテの前に、遂にはウォーシロフ少将によるクーデターまで起こしたが、かえっておのが首を絞める結果に終わっただけだった。

一九七七年、連邦空軍空兵隊に吸収されることで、連邦陸軍は一九二九年の“シエルメス恒星間連合条約”締結以来四八年間の歴史を閉じる。

連邦陸軍を崩壊させ、最終的に連邦空軍に統一吸収する作業を完成させたとき、シャトンヒュッテは生涯の絶頂期にあった。最早彼の権限を掣肘するものはなく、“シエルメス帝国”の玉座すら彼の手の届く位置にあったのである。

“同一人物が一年以上以上継続して連邦大統領職を務めることはできない”

とは連邦憲章の規定だが、シャトンヒュッテはこの規定の改訂をもくろんだ。規定を改訂し、終身大統領の地位を手に入れれば半ば以上王冠を我が頭に戴いたにも等しい。

既にこの時期、連邦安全保障会議は連邦上院に改められ、また連邦

下院も新設されていたが、一九七八年、大統領改選を目前に控えて憲章改訂法案は上院を通過、下院に送付された。

しかし……

シエルメス連邦初代大統領は、遂にシャトンヒュッテ朝シエルメス帝国の開祖としての名を歴史に刻むことはできずに終わる。

一九七八年一月二四日、シャトンヒュッテがデフォルハート州シユタルウイン市内で大統領選挙に向けた遊説中、市内をパレードする大統領専用車の前に一人の青年が警備の警官の制止を押し切って現れた。危険を悟った大統領護衛官は無警告で発砲、十数発もの大口径銃弾を全身に浴びせられた青年の肉体は瞬時に四散したが、同時に凄まじい爆発がシャトンヒュッテの肉体ごとシユタルウイン市そのものを破壊し尽くしたのである。

のちの調査により、青年は“第二次惑星統一戦争”末期に開発されたカリフォルニウム核爆弾を使用したことが判明しているが、青年の身元については一切の資料が沈黙を守っている。それにしても、かつて自分自身が開発を推進させた超小型核爆弾が自らの生命と野望に終止符を打つ役割を果たさそうとは、辛辣な策謀家だったシャトンヒュッテにも予測し得るところではなかっただろう。

肉体の四散とともに、シャトンヒュッテの野望も四散し、シャトンヒュッテ朝帝国もまた歴史上のifの彼方に消え去った。そして、この巨人の死は、漸く安定しかかっていたシエルメス連邦の支配体制をも決定的に動揺させたのである。

凡庸の政治家の手によって治めるには、人類史上最初の統一国家であるこの連邦国家は巨大過ぎた。連邦陸軍の残党、連邦政府の単一支配に反対する国家主義団体の蠢動など、シエルメス連邦が真に連邦圏

最終稿

の主たるを主張し得るようになるまで、なお十数年の時を要したのである……。

“内戦期”と一般に呼ばれるこの時期こそが“第二次惑星統一戦争”に相当するだろうとするのが連邦の歴史家の定説である。

“内戦期”、連邦政府の支配に反発して蜂起した植民星軍の中で最大の勢力を誇ったのがジャービス・セイヤー・ネレイド連邦空軍中佐の指揮した、いわゆる“ザ・ジャービス”である。ジャービスはレイモンド・ファール・ネレイド元帥自身の長男だった。

ジャービス・ネレイド自身は、それほど軍事的才能に恵まれていなかったが、衆目を引きつける容姿と弁舌を併せ持っていた。対立する複数の陣営の首脳でさえ、ジャービスの前では握手を躊躇わなかったとさえ言われている。彼らを支援する植民星も多く、ジャービスを補佐する優秀な軍事指揮官も少なくなかったのである。

経済・軍事両面で連邦に比肩する勢力を蓄えた“ザ・ジャービス”は、その後一〇数年にわたって連邦空軍艦隊をしばしば撃破し、連邦政府を窮地に追いつめたのである。

事態を一気に逆転させたのは、レイモンド・ファールの長女マリオン・フェアリの登場だった。兄ジャービスとは一〇歳以上も歳の離れたマリオンは、少女時代には初恋の相手を前にして一言も口を利けないほどの内気な性格だったと言われているが、用兵者としての立場に立つたとき、その性格は一変する。

艦隊戦闘の天才と言われたマリオン・フェアリは、“ザ・ジャービス”を三度にわたって艦隊戦で決定的に撃破する。特に二度目の艦隊戦闘：“ローゼンバツ八宙域会戦”では“ザ・ジャービス”の旗艦を撃沈してジャービスを戦死させ、“ザ・ジャービス”の組織そのものに致命傷を与えるに至った。

さらに、ジャービスの死後、急速に崩壊への道を歩み始めた“ザ・ジャービス”に、マリオンは容赦なく追い打ちをかける。彼らを壊滅に追い込むまでの艦隊戦闘は、四年間に大小合わせて二一回。この内一六回に完勝し、六回は互角の戦闘を演じて“ザ・ジャービス”を完全に崩壊させたのである。

しかし、個人的には彼女は不遇だった。二七歳で大将に昇進し、艦隊最高司令長官の地位を与えられた直後、彼女は突然に軍を罷免された。理由は“ザ・ジャービス”の残党と通じて、連邦政府の転覆を謀ったためとされたが、歴史家や戦死研究家は、公表された“事実”に納得していない。

『彼女を訴追したのは、彼女自身の父レイモンド・ファールだった。彼女の罪状は、彼女の有り余るほどの軍事的才能に対してレイモンド・ファールが抱いた恐怖の裏返しにほかならない。そして、そんな彼の恐怖に巧みにつけいつたのが、結局はその後五〇〇年近いレイド一族の系譜を継承するチェスター・ファーン。すなわち、レイモンド・ファールの実弟である。』

軍を逐われると同時に婚約者にも去られ、マリオン・フェアリは数年後、辺境の惑星でひっそりと病死する。彼女に先立つように、弟チェスター・ファーンに逐われたレイモンド・ファールもまた、連邦空軍を退いて僅か一年目に失意の死を遂げることになった。

そして、チェスター・ファーンの麾下、連邦空軍は容赦のない暴力で連邦圏を再統一する。マリオン・フェアリの天才によってほとんどの反対勢力が一掃された後となつては、残敵掃討と入って差し支えない程度の戦いであり、実際チェスター・ファーンはその手記の中で『残務整理』の言葉さえ使っている。

残敵掃討にしろ残務整理にしろ、内戦に陥った連邦を分裂の危機から救い出し、“連邦圏の鋼鉄の爪”連邦空軍こそが連邦が連邦たる所以である、との連邦の国是が固定するに至つたのがこの時期であつた

最終稿

ことは間違いない。

ファエリック・トヒユナはシエルメス連邦の余りに血塗られた生い立ちに軽い恐怖を覚えていたのである。……彼は『惑星統一戦史』を次の一文で閉ざしている。

“……前連邦暦一九九〇年、連邦政府は旧暦を廃止して連邦暦の新設を定めたが、連邦暦の第一ページは文字通りに血を以て記されたものにほかならぬことに、今連邦市民の幾人が思い至っているだろうか”

以後、連邦暦五七二年に至るまで、連邦の歴史は文字通りに戦乱と流血とが覆い尽くすことになる。

シャトンヒュッテの登極は、ただ単に連邦の歴史を真紅に塗り上げる結果になつただけではない。彼の登極と、覇業半ばにしての死はシユレフ・コングロマリットの台頭を促すことになる。

シユレフ・コングロマリットの前身は、フィアモント・ファンデルフェルトなる少壮の実業家が一代で創立した星間貿易商社である。銀行家としてその事業歴を開始したファンデルフェルトは、シエルメス連邦の前身である『シエルメス恒星間連合』を支持し、“惑星統一戦争”に際して『連邦同盟』に資金と武器を提供することで、急速に事業を拡大した。この時期に、フィアモントは、まだ少壮の高級士官に過ぎなかつたシャトンヒュッテと知り合う。後、ファンデルフェルトがシユレフに発展する過程でそつであつたように、連邦空軍とのコネクションの必要性を痛切に感じていたフィアモントは、“惑星統一戦争”直後、連邦空軍で最も強硬に武力弾圧を唱えていた一派に接近する。ただし、フィアモントの狡猾さは、この最強硬派に連邦空軍の主導権をとらせなかつたことである。

巧妙な煽動が連邦空軍内部での主導権争いを引き起こし、更に連邦政府に対するクーデター未遂事件が頻発する。連邦政府は連邦空軍の高級士官の粛清に乗り出し、二〇名に及ぶ最強硬派派将官を罷免した。これがまさにフィアモントの狙いであり、“第二次統一戦争”が勃発したとき、連邦空軍の頂点に最も近い位置にいたのが他ならぬ後の初代連邦大統領ステイクフェスト・シャトンヒュッテだった。

シャトンヒュッテの死後、フィアモントの後を継いだフェルトリック・マーゲン・ファンデルフェルトは、“第三次戦争”期にレイモンド・ファール・ネレイド連邦空軍元帥と親交を結ぶ。時流を読みぬくに長けたフェルトリック・ファンデルフェルトは、その途上で無数の敵対者を葬り去り、また併合し、連邦最大の巨大コングロマリットの基礎を築き上げたのである。

連邦暦一〇〇年代、連邦が銀河系へ発展していく過程でファンデルフェルト星間貿易を牛耳ったのが、ベルンハルト・シュレフなる辣腕家である。富裕な家庭に生まれ育ち、父親から銀行事業を譲り受けたフィアモント・ファンデルフェルトとは異なり、ベルンハルト・シュレフは中流以下の家庭に生まれている。最初、官僚を目指して連邦政府の工務省に入ったものの、間もなく官僚としての前途を見切りをつけて退職。一〇年後、タート・レイピア恒星区での宇宙鉱山事業に成功したシュレフは、鉱山の所有権と引き換えにファンデルフェルト星間貿易の経営陣の一角に席を占めることに成功する。それから約二〇年の間に、ベルンハルトは、ファンデルフェルトの経営権を、真面目だが有能さに欠けるフィアモントの後継者から奪いとった。

ベルンハルト・シュレフが着目したのは連邦空軍の武力と、ティルシニアの後継者であるタート・レイピア恒星区の政治的な支配力であ

る。

「戦争は政治の継続かも知れないが、政治は経済の継続である。戦争を制御できれば、経済も支配できる」

このベルンハルトの着想が、大会社に発展しつつあったとは言え単なる星間貿易商社でしかなかったファンデルフェルトを、連邦圏を裏面から支配する巨大な複合企業体に発展させる契機となった。

圧倒的な資本力にものを言わせてタート・レイピア恒星区政府を手中に収めると、ベルンハルト・シュレフは連邦空軍に接近する。連邦空軍の発注する膨大な装備、消耗品、艦艇がシュレフ系の資本から供給され、地方の叛乱鎮圧に向かう連邦空軍兵はシュレフの提供した輸送船で出撃した。

連邦圏最大の資本に成長したシュレフを、更に連邦圏の経済力の半ばを支配するまでに巨大化させたのが、植民恒星区コーラルだった。

連邦圏の中央に位置する抜群の地の利、豊かな農鉱業生産を誇るカルシュを初めとする植民惑星群……タート・レイピア恒星区出身の有力政治家グループと結びついたシュレフは、数年のうちにコーラルの全産業を掌握した。コーラルが産出する一切を吸い上げ、連邦空軍の強大な武力によってコーラル全土を「鋼鉄の爪」で抑え付けたシュレフ・コングロマリットは、今や「連邦圏のもう一つの政府」と呼ばれる存在に成長するに至る。そして、シュレフ・コングロマリットの支援を受けた政治家グループは、やがて『連邦党』としてシェルメス連邦の政界を二分する巨大政党へと発展する。

ステイクフェスト・シャトンヒュッテは連邦圏の帝王にこそなり得なかった。しかし、彼の遺した連邦空軍とシュレフ・コングロマリットは、武力と経済力でシェルメス連邦に君臨する、事実上の帝王としてその後五〇〇年に及ぶ連邦の真紅に彩られた歴史の主役としての役割を果たし続けることになる。

最終稿

対象として捉えたという点において例外だったのである。

シャトンヒュッテは、連邦そのものを我が手に収めようとして挫折した。

しかし……レーフル・ファウルスは彼なりに歴史上のifを設定してみる。

暗殺者の手にかからなければ、彼はあるいは連邦を手にかけていたかも知れない。シャトンヒュッテが王冠に手をかけることができた所以のものは戦乱である。今、シエルメスは史上最初の外敵ル・ヨントとの戦いでその支配体制は揺らぎ、混乱と恐慌が手に手をとって全土を踊り回っている。

この戦争が始まるまで、レーフルは一介の士官学校生徒に過ぎなかった。“ミットリツフェル宙域会戦”が終わった時点でさえ、未だ空軍大尉に過ぎなかったのだ。それが、“グラン・ハイ ローゼンバツ八戦役”で、艦隊指揮官としての力量を示した結果、位階は一気に少将に跳ね上がった。

シャトンヒュッテにしろ、“惑星統一戦争”の過程で抜擢されるまで無名の士官に過ぎなかったではないか……

当時、連邦は、タート・レイピアとセリアの二恒星区に中立諸国の領域を加えた宙域を占めるだけだった。今の連邦とは何か。最大直径一万光年の余に達し、なお銀河全域を掌握しようとする巨大な恒星系間国家。連邦を手に入れば、彼方のあの星々もまた彼の掌に握り締められることになる。

レーフラムはおそらく気づいてはいなかっただろう、少女ともみまごうような優しい容貌の弟の心に宿った巨大な野心に。

レーフル・ファウルス・ネレイドもまた、連邦に忠実な軍人を世に送り出し続けてきたネレイド家にとって例外的存在だった。兄レーフラムと全く逆の意味で、即ち彼の祖先にとっての忠誠の対象を征服の

最終稿